

Oscar Wilde : “The Nightingale and the Rose”

—True Lover と True Artist—

鶴川 雅江

倉敷芸術科学大学教養学部

(1999年9月30日 受理)

序

西暦2000年で、Oscar Wilde (1854–1900) の没後100年を迎える。この作家を描いた映画のヒットやロンドンの Wilde 像建立は彼への高い注目度の現れであり、Wilde 再評価の時期が訪れていることが窺われる。ここで扱う “The Nightingale and the Rose” (以下 “Nightingale” と省略) が収められている *The Happy Prince and Other Tales* は、1888年に出版されている。子煩悩な Wilde が息子たちに物語を語ったことが発端とされているが、“Nightingale” は子供向けとしてはいささか cynical な内容であると言われている¹⁾。表題の “The Happy Prince” に及ばず、さほど重要視されない小品ながら、単に童話としての範疇に位置づけるには困難と思われる様々な問題を含んでいるのである。また、その美学的な卓越にも注目すべきであるとして、ここでは “Nightingale” を取り上げ分析することにする。

Wilde は書簡の中で Hutchinson, Melvill にそれぞれ以下のような発言をする。

[I]n writing it [“Nightingale”] I [Wilde] did not start with an idea and clothe it in form, but began with a form and strove to make it beautiful enough to have many secrets and many answers.²⁾

... ‘The Nightingale and the Rose’ is the most elaborate. ...³⁾

“Nightingale” の執筆においては、構想を練ってからそれを形式で色づけしたのではなく、形式から始めたという。そして、彼自身にとっては苦心の力作であるとしている。形式から始めたのは、秘密や答えをいくつも持ち得る美しさを目的としたからである。

本論では、Nightingale を一人の芸術家として捉え、テキストを分析していく。Wilde が敬愛した Shakespeare や Keats の戯曲や詩に限らず、Nightingale は文学作品に登場することが多い⁴⁾。また、バラとの組み合わせはペルシアの詩に読まれ、この鳥がバラに恋し、そのとげに自らの身体を刺して歌い、死んでしまうという伝説の存在が指摘されている⁵⁾。このように素材としての Nightingale は、あまり珍しいものではなく、その多くを Wilde は参照し得たということになる。では、この Wilde のテキストにおいては、どのような独自性がこの鳥に託され顕在化したのだろうか。前出の Wilde から Hutchinson への手紙には、

“The nightingale is the true lover, if there is one.” という記述も存在する。テキストを倫理的に解釈すれば、true lover という名称は、愛のために自らの命を犠牲にした Nightingale の他愛的な側面に価値を見いだしていることになる。そして、この鳥の創るバラが捨てられ、その死が無駄なものに終わる結末は、悲劇であると捉えられよう。しかし、既に述べたように、Wilde は謎や解釈をいくつも含有する美の創造に努めたのである。作家の意図を重視することが妥当かどうかは、読者各自の判断に委ねられてはいるものの、一面的にありきたりな読みをするだけで充分であるとは言い難い。通常子供向けの童話というと、たとえそれが元来残酷なものであったにしても、改編が重ねられた結果幼い心に夢を与え、勧善懲悪の倫理観を植え付けるものとして理解されるであろう。しかしここでは、従来の童話に求められる教育的効果や安らぎを排除し、審美主義的思想を色濃く反映した一つの用例として、このテキストを分析したい。そのために、Nightingale に投影された様々な芸術家としてのイメージを、順を追って見ていくことにする。

I 美を記述する Nightingale

Nightingale は主に理想的な愛の存在を信じ、それを語り、自らその行動に移る。Nightingale が愛の素晴らしさを語る言葉を、実際に見てみよう。

‘Surely Love is a wonderful thing. It is more precious than emeralds, and dearer than fine opals. Pearls and pomegranates cannot buy it, nor is it set forth in the market-place. It may not be purchased of the merchants, nor can it be weighed out in the balance for gold.’ (188) ⁶⁾

The Picture of Dorian Gray の第11章を彷彿させる、宝石を使用した表現である。エメラルド、オパール、真珠、ザクロ石、その他黄金を含めると5種類も羅列される。緑、白、赤、金と色とりどりの宝石を用いて、愛の美しさ、貴重な素晴らしさを語る。このように Nightingale は、視覚に訴えてその美しさを効果的に表現する。またそれだけでなく、Nightingale が鳴き鳥であることから、聴覚的な面にも注目すべきである。pearls と pomegranates (*Dorian Gray* 第11章では Garnet となっている⁷⁾) の頭韻を中心として、precious, opal, market-place, purchased と [p] の音を響かせている。それにより、“her [Nightingale’s] voice was like water bubbling from a silver jar” (193) と描かれるこの鳥の声と併せて、聴覚的にも美しいイメージが広がる。このように上記引用では、人間の言葉という媒体を用いながら、映像的そして音楽的效果を醸し出す。Nightingale に委ねられた芸術性が発揮されている好例である。

愛を重んじる Nightingale は、自然に囲まれ “to sit in the green wood”, 太陽や月を眺め “to watch the Sun. . . and the moon” (191), 花々のかぐわしさを愛でることの中に生きる喜びを見出している。しかし, “Love is better than Life, and what is the heart of a bird compared to the heart of a man?” (192) と叫び、恋する Student の誠実な愛をただひたすら信じて、

バラを手に入れるために命を捨てる覚悟をする。バラの木の傍らに在るものの、特に誰に聞かせるでもなく生きる喜びと愛の貴さを語る Nightingale は、作家の代弁者となり、その表現力を発揮するのである。Wilde の逆説的な言によると、「行動」よりもそれを「記述」する方が困難だということになる⁸⁾が、Nightingale は愛から生じるバラの創作という「行動」だけでなく、人生や愛の素晴らしさを「記述」することも成し遂げる。Nightingale は愛や人生の美を解し、目にも耳にも訴える美として記述する。言葉という媒体を用いるその記述力から、文学作家のような機能を担っていることが、ここで明らかになるだろう。

II 美をもって美を創り出す Nightingale

Nightingale は美を記述するだけでなく、その美しい歌声によって、深紅の美しいバラを創り出す芸術家でもある。バラをモチーフにした文学作品は、Nightingale 以上に頻繁にあり、その芳香や色彩、形、そしてとげなどから、バラが美しさや冷酷さを表現する常套手段として用いられるとしても過言ではない。このテキストにおいて Wilde が扱う際には、その芳香に言及がなされることはなく、ただ色彩の視覚的な側面と Nightingale の胸を刺すとげの痛々しさにのみ焦点が当てられている。そして、バラを入念に描くことで、Nightingale が創り出すものの偉大さを予め読者に植え付けている。まず、このテキストのバラの豊かな色彩表現を確認することにする。

Student のために赤いバラを手に入れようと庭を飛びまわる Nightingale の訪れにより、白、黄、赤のバラの木が登場する。各々のバラの木の、比喩表現を用いた花自慢に耳を傾けてみよう。バラの木も Nightingale 劣らず、自らの花の美を心得て競うように語る。(便宜上原文を分割)

'My roses are white. . .
as white as the foam of the sea,
and whiter than the snow upon the mountain. . . .' (190)

'My roses are yellow. . .
as yellow as the hair of the mermaid who sits upon an amber throne,
and yellower than the daffodil that blooms in the meadow before the mower comes with his scythe. . . .' (190)

'My roses are red. . .
as red as the feet of the dove,
and redder than the great fans of coral that wave and wave in the ocean-cavern. . . .' (190—91)

Rodney Shewan はその著作の中で、テキストと *Salomé* の関連性を *Songs of Solomon* と絡めて論じている⁹⁾。一方、先頃出た『オスカー・ワイルド事典』では *Salomé* のセリフが、レ

トリックという観点から分析されている¹⁰⁾。Shewan の記述から少し進めて、そのような分析方法を、“Nightingale” のテキストの上記引用にも適用することができる。“My roses are. . .”, 次に “as ~ as ~”, そして “and ~ er than ~” という語法の並列である。同様に主題を茎とすると原級を用いた葉, 比較級を用いた葉という色の異なる 3 種類のバラの木の図案が出来上がる。また “mower”, “snows that lie on the mountains”, 後に唇の赤さについて述べられる “feet of the doves”, “coral” といったイメージ¹¹⁾は “Nightingale” と *Salomé* 両方に共通するものである。Shewan の議論の妥当性を認めるとともに、1891年に執筆された代表作とも称される有名な戯曲に、1888年出版のこのテキストが先駆け、既にその華麗さを披露していることの意義深さが指摘できよう。

同様に、赤いバラの木でとげを刺した Nightingale が花を咲かせる過程において、今度は character の言葉ではなく記述としてであるが、明喩が頻繁に用いられている。(便宜上行の分割あり)

And on the top most spray of the Rose-tree there blossomed a marvellous rose,
petal following petal, as song followed song. Pale was it, at first, as the mist that hangs over the
river—pale as the feet of the morning, and silver as the wings of the dawn.
As the shadow of a rose in a mirror of silver,
as the shadow of a rose in a water pool,
so was the rose that blossomed on the topmost spray of the Tree.

(194) (イタリック筆者)

“petal following petal, as song followed song” と畳み掛けるような調子で述べた後は as を反復させ、バラが創られて徐々にその存在感を強め、次第に現実味を帯びていく様子強調する。“As the shadow of a rose in ~” という 2 行の反復は、バラの変化に若干の休止を与え、枝に咲き出たバラの描写のまとめとし、次のパラグラフの木と Nightingale へと視点を移すよう促す。ここでは pale と silver が色彩語としては使われるが、直前に Nightingale が歌った歌 “the birth of love in the heart of a boy and a girl” (194) にふさわしく、初々しくみずみずしい表現を伴う。前に見たバラの木の白、黄、赤の成熟したバラの花自慢も、咲き出たばかりの若いバラの描写も、明喩を伴う色彩豊かな表現が見事である。このように、レトリックを用いながらバラを華麗に描くことにより、その貴重な美しさは読者に強烈に印象づけられる。

歌から赤いバラを創り出す際には、Nightingale の苦痛の強さに従って歌の激しさが増し、次第に強くなるバラのとげの苦痛に耐えることで、この鳥の愛の深さが強調される。更に、“the birth of love in the heart of a boy and a girl” (194), “the birth of passion in the soul of a man and a maid” (194), “the Love that is perfected by Death, of the Love that dies not in the tomb” (195) と、Nightingale の愛とともに歌の内容の愛もが深まり、すべてが強く激しく

なってゆく。最期にふりしぼった調べは壮絶で、月や出来上がったバラ自体を恍惚とさせるだけでなく、Echoや葦もじっとしていられぬ程である。Nightingaleの創作行為は、その死とともに終末を迎える。そして、様々に美しく描写されるバラを創り出すその材料は、周囲を酔わせる歌声なのである。材料と完成品の両者に美しさが認められる。ここでは、声音を媒体とした本能的、原始的なNightingaleの音楽性、そして音楽性の魔力によって形成される錬金術にも似た神秘的な創作力の二つが明らかになった。歌うNightingaleは音楽家であり、そして色彩豊かに紹介されるバラという芸術作品を命懸けで創作するこの鳥は造形作家でもある。

Ⅲ 美を尊重する Nightingale

Nightingaleは自ら創り出した美だけでなく、周囲にあるそれを尊重するという点にも注目してみたい。それにより、一層多面的な芸術家としてのNightingaleの姿が明らかになるだろう。ここでは憧れの女性と踊りたいがために、Nightingaleとバラを犠牲にしてしまうStudentに焦点を当てることになる。テキストではまず、彼の外見から語られる。彼は“beautiful eyes” (187), (192)を持ち、Nightingaleは彼を次のように描写する。

‘His [Student’s] hair is dark as the hyacinth-blossom, and his lips are red as the rose of his desire; but passion has made his face like pale ivory, and sorrow has set her seal upon his sorrow.’ (187–88)

前出の*Salomé*のIokanaanを想起させるような美しい風貌¹²⁾に、Nightingaleは注目する。一方、Studentの内面は“he [Student] only knew the things that are written down in books.”

(192)と、衛学的で感受性に欠ける。自分の庭には赤いバラがないので好きな女性と踊れないと嘆き悲しんでいながら、“after a while, he [Student] fell asleep” (193)とよく眠る鈍感さを見せ、Nightingaleが創り出したバラを“what a wonderful piece of luck!” (196)と何の疑問も持たず喜んで手折る軽率さを示す。*Romeo and Juliet*のJulietが、名前が異なってもバラは甘く香ると語る¹³⁾のとは異なり、Studentは“It is so beautiful that I am sure it has a long Latin name” (196)と、美しさ=長い名前を有するという安易な図式を考えることしかできない。その美しさをNightingaleのような繊細さをもって「記述」することのできぬ、感性の乏しさをあらわにするのである。外見はbrownとしか語られず、内面は感性に富むというNightingaleと比較すると、両者が正に逆の性質を有することは明らかである。そんな学生の美しさの中に愛の存在を信じ、魅せられて、Nightingaleはそれを尊重する。Studentを信じて疑わないこの鳥には、肯定的にも否定的にもinnocentな側面があることに気づくであろう。

Studentは主に2回の発言において自身の内面を呈示している。バラを創る前にOak-treeのために別れの歌を歌うNightingaleを目にして、何も知らないStudentは述べる。

“She [Nightingale] thinks merely of music, and everybody knows that the arts are selfish. Still, it must be admitted that she has some beautiful notes in her voice. What a pity it is that they do not mean anything, or do any *practical* good.” (193) (イタリック筆者)

また2回目の発言は、テキストの終わりに配されている。本人の望みのバラを贈ろうしたにもかかわらず、意中の女性に断られてしまう。そこで、Studentはバラを捨て、女性の雑言を耳にし、その場を立ち去りながらつぶやく。

‘What a silly thing Love is,’ said the Student as he walked away. ‘. . . In fact, it is quite *unpractical*, and, as in this age to be *practical* is everything, I shall go back to Philosophy and study *Metaphysics*.’ (197–98) (イタリック筆者)

上記2回の発言には、イタリックで示す通り、共通する *practical* という語が存在する。学術的で感性に乏しい Student は、芸術と愛に実用性を求めようとして、結果両者に無意味なものという烙印を押す。彼は Nightingale の声音に美を見いだすものの喜びを享受する能力に欠いており、それを *selfish* であると考える。また愛が何たるかを理解することはない。彼が憧れているのは、“If I [Student] bring her a red rose, I shall hold her in my arms, and she will lean her head upon my shoulder, and her hand will be clasped in mine.” (188) と、肉体的な接触の喜びにすぎない。或いは、彼は視覚や聴覚には鈍感で喜びや快楽を覚えることではないが、触覚の快楽の感受には秀でているのかも知れない。また、この時代は実質的なものがすべてだと考える点には、功利的な同時代人への皮肉も読み取れよう。

ここで何より重要なのは、どちらも実質的には役立たないと発言させる点で、芸術と愛が同一線上に配されていることである。芸術を解することのできぬならば、愛を知ることではない。その逆もまた真である。愛と芸術を同一線上に置くと、Nightingale の行為や一見悲劇的に思われる無駄な死も、理解しやすくなるであろう。すなわち、この鳥は Iokanaan のような美しい風貌を持つ学生のために、命を懸けて自らの愛＝芸術を尊重し、それに殉じるのである。また、Nightingale ほどの勇敢さを伴うと美しい死も、学生の言う芸術の自己中心性で見做すことも可能である。つまり、Nightingale が愛と美に殉じるのも、視点を換えれば、独りよがりな *egoist* の *selfish* な行為と捉えられなくはない。一見学術的で身勝手な Student の発言にもまた、芸術の側面が見いだされる。Nightingale は Student の内面の空しさを理解せず、頼まれた訳でもないのに自ら死を選択する。通常利他主義者と見做される Nightingale は同時に、利己主義者とも呼ばれ得るのである。

バラも結局最後には “[H]e [Student] threw the rose into the street, where it fell into the gutter, and a cart-wheel went over it.” (197) と、Student に投げ捨てられ、溝に落ち、荷車に轢かれてしまう。美しいだけでなく、Nightingale が生命と引き換えにした貴重な芸術作品であるこのバラが、無残にも呆気ない最期を遂げるのである。そしてそれが他の装飾的なバラ

の描写とは異なり、比喩や反復を避け淡泊に語られる点で、Wildeの強い意図を読み取ることができよう。芸術家 Nightingale と芸術作品 rose が遭遇する、冷酷な現実というわけである。この点においても、学生の発言の妥当性が認められる。確かに、Nightingale の愛と美を尊重した芸術的行為も出来上がった作品も、結局 practical good を生むことはない。

このように、Nightingale は文学作家、音楽家、美術家としてだけでなく、芸術＝愛を尊重することで、学生の発言という間接的な形によってではあるが芸術の別の側面も提示する。倫理的な尺度で計れば献身的とされるが、芸術家として美を追求する Nightingale の行動は egoistic であるとも考えられ、また芸術作品と命を引き換えにしたものの、それが実用性に欠くことも否めない。美を果てしなく追求し、時には死をも厭わない芸術尊重の壮絶な姿を、Nightingale は自ら身をもって呈している。そして、他の助力によって芸術の多様な側面、ひいてはその否定的な姿をも伝達するのである。Nightingale は、芸術を理解しない者にとって芸術は selfish で unpractical であること、その無益さをも自らの生きざまによって知らせるのである。文学、音楽、美術に通じた Nightingale は Student の美しさを尊重し、その総合的な芸術を披露して死ぬことにより、自らの芸術に対する評価や作品への対応をも明らかにする。芸術を重んじながらその多面的な姿を示す点において、作家だけでなく批評家の役割をも担うのである。

むすび

Wilde による true lover という Nightingale の呼称は、一見自己犠牲的な愛に殉じたこの鳥の倫理的価値を重んじた評価と捉えられ、事実そのような解釈が見うけられる¹⁰⁾。しかしここで、異なった解釈の余地が認められよう。まずはじめに文学作家としての Nightingale を検証し、美を理解しそれを美しい言葉で述べ、視覚にも聴覚にも訴える、Wilde の代弁者的役割を見いだすことができた。また、様々なバラの描写の卓越から、そのような美しいバラを他者を恍惚とさせる歌声から創作する、音楽家、造形作家としての側面を考察してきた。最後に、内面は空虚だが外見的には美しい Student に愛を見いだし尊重する Nightingale が、実は egoistic で無益な行動をしてしまうことで、芸術を多面的に理解させる芸術批評家としての姿も認められた。学生の発言には、作家の同時代人への皮肉とともに、practical という語から愛と芸術の同一性を読み取ることができるのである。

愛＝芸術という等式が成り立つと仮定すると、true lover という語も true artist と言い換えられる。唯美的に解釈したならば、芸術家 Nightingale が美しい Student が欲しがめる美しいバラを創るために美しく歌い、愛＝芸術に殉じるという正に審美的行為を成し遂げる芸術家礼讃の物語と捉えられるのである。そういう意味では、Nightingale の死は、哀れを誘うものでも無駄なものでもない。芸術家としての人生そして使命を全うした、意義深い死と定義づけられるのである。芸術家 Nightingale は自ら決心して芸術のために egoistic に死に、芸術作品バラも practical good をなんら生み出すことなく破壊される。しかし、文学、音

楽, 美術, 批評からなる総合的な芸術家である Nightingale の生きざまには, 正に理想的な芸術家の肖像が投影されているのである。

このように, characters の一部に過ぎない Nightingale を取り上げても, 他愛主義者や悲劇のヒロイン, 或いはそれとは正反対の egoistic な芸術家という具合に解釈に幅が認められる。そして, character 分析以外の観点からも, 同様に様々な解釈の可能性を見いだすことができよう。形式で始めることにより, Wilde が目指した many secrets and many answers を含む美の創造は, 成し遂げられたと考えて良いであろう。

Notes

- 1) 山田勝編, 『オスカー・ワイルド事典』(東京: 北星堂, 1997), 166-67.
- 2) ed. Rupert Hart Davis, *The Letters of Oscar Wilde* (London: Hart-Davis, 1962), 218.
- 3) *Letters*, 220.
- 4) William Shakespeare, *The Taming of the shrew* (2 幕 1 場), *Romeo and Juliet* (3 幕 5 場)
John Keats, "Ode to a Nightingale"
その他 S. T. Coleridge, "The Nightingale", John Milton, "Sonnet" i など
- 5) William Shakespeare(現在では Richard Barnfield 作とされる), "The Passionate Pilgrim" XX *The Arden Shakespeare The poems* (London: Routledge, 1994), 174-75.
ゴージェイ, 『ナイチンゲールの巣』, 『ゴージェイ幻想作品集』店村新次, 小柳保義訳(東京: 創土社, 1977), 437-44.
シラーズのハーフィズ, 『抒情詩』10, 225, 『アラビアベルシア集』世界文学大系68 蒲生礼一訳(東京: 筑摩書房, 1964), 377, 385.
サアディー, 『薔薇園(グリスターン)』東洋文庫12 蒲生礼一訳(東京: 平凡社, 1994), 7, 15, 143, 145, 292.
- 6) Oscar Wilde, "The Nightingale and the Rose", *The Collected Works of Oscar Wilde* Vol. X. (London: Routledge Thoemmes, 1993), 187-98.
"The Nightingale and the Rose" の引用はこの版により、引用のあとの括弧はそのページ数を示す。
- 7) Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray and Other Writings* (New York: Bantam Books, 1988), 118.
- 8) Oscar Wilde, "The Critic as Artist" *Plays, Prose Writings and Poems* (London: Everyman, 1991), 21.
- 9) Rodney Shewan, *Oscar Wilde: Art and Egotism* (London: Macmillan, 1977), 45.
- 10) 『オスカー・ワイルド事典』, 464-65.

Your [Iokanaan's] body is white like the lilies of a field that no *mower* has ever mowed. Your body is white like *the snows that lie on the mountains* of Judaea and then flow into valleys... (イタリック筆者)

"Your body is white" の反復, "like ~ that ~" の並列, 明喩が明白である。そして主題 "The body is white" を茎とすると, 明喩 "like..." が葉に当たりアラベスク模様となる。そのようなアラベスク模様が Iokanaan の肉体だけでなく, 髪, 唇と述べられるにつれて広がってゆき, 全体として大きな模様へとまとめられるという。

- 11) Oscar Wilde, "Salomé" (Tr. Richard Ellmann) *The Picture of Dorian Gray and Other Writings*, 273.

(なお mower と snow については10)を参照)

SALOME: Your mouth is like a scarlet band upon an ivory tower. It is like a pomegranate cut with an ivory knife... Your mouth is redder than the feet of those who tread grapes in the winepresses. It is redder than *the feet of the doves* who live in the temples and are fed by the priests. It is redder than the feet of a man coming from a forest where he has killed a lion and seen gilded tigers. Your mouth is like branch of *coral* that fishermen have found in the twilight of the sea and have put aside for kings...

(イタリック筆者)

- 12) "Salomé", 272-73.
- 13) *Romeo and Juliet* (2幕2場)
- 14) Norbert Kohl, (Tr. David Henry Wilson) *Oscar Wilde The Works of a Conformist Rebel* (Cambridge : Cambridge U. P., 1989), 52-53.
Cristopher S. Nassar, *Into The Demon Universe* (New Haven : Yale U. P., 1974), 29.
千葉剛, 「Oscar Wilde の fairy tale (その3) -The Nightingale and the Rose について-」, 『東京農業大学一般教育学術集報』19. (1989. 5), 15-21.
佐藤真二, 「童話集にみる Wilde の思想」, 『試論』(駒沢大学大学院英文学研究会) 18. (1990. 12), 87-97.

Oscar Wilde : “The Nightingale and the Rose” — True Lover and True Artist —

Masae UGAWA

Faculty of College of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1999)

“The Nightingale and the Rose” is one of the fairy tales in *The Happy Prince and Other Tales* written by Oscar Wilde. It, however, is so cynical and elaborate that adults rather than children can appreciate its profound beauty adequately.

Since the main character Nightingale resigns her life to give the Student a red rose, her self-sacrificing love is frequently dealt by those who attach a moral to the story. Regarding Nightingale as an artist, we can read the text differently. The bird describes the beauty of life and love affectionately like a writer, sings a moving song as a musician, creates a beautiful red rose like a plastic artist, and shows respect for art which is impractical and sometimes selfish as if a critic supported art fully. From this point of view, we realize Nightingale’s death is destined not for moral’s sake but for art’s sake.

Wilde’s attempt to make the story beautiful enough to have many secrets and many answers seems to be a positive success, for the text carries the great potential for various discoveries.